

第2節 北米

太田 浩

環太平洋地域の大学は、留学生を引き付けるために様々な国際教育プログラムを開発しており、留学生の獲得をめぐる大学間の熾烈な競争が繰り広げられている。90年代における世界的な留学生受入れ数の増加において、カナダは10%程度という地味な増加をみた。豪州では同時期に150%弱増加し(CBIE, 2002)、米国は留学生受入れ大国として、全世界の留学生の4割以上を占めていたが、911事件以後のビザ政策の転換の影響で、留学生が包括的なマーケティング戦略をとる豪州や英国等に流れ出した。留学生数の伸びは急速に停滞し、2003年度には1971年以来の減少をみた。このような留学生の受入数が国際教育の中心的な話題になるにつれ、英語圏における高等教育の国際化は単に英語をベースとした教育プログラムと学位の商品化でしかないと揶揄されるようになった。本節では、北米(米国を中心に)の高等教育における国際化の文脈について、その背景や根本的な理由を踏まえながら概説したい。

1. 北米における高等教育の国際化に関する定義

高等教育の国際化は北米の研究者によって、どのように定義されているのだろうか。代表的なものを以下に記したい。まず、国際化とは、大学のキャンパスをより国際志向なものとする過程(process)という主張がある(Pickert & Turlington, 1992; Hanson & Meyerson, 1995; Harari, 1989)。これは日本でもよく言われる、いわゆる「内なる国際化」と概念的に共通するところが多い。次に、国際化とは、国際教育をカリキュラムに統合していく過程(process)であり、これこそが、大学全体に対して広範に組織的な変化をもたらす中心的なものであるべき(決して傍流のものであってはならない)との定義がある(Mestenhauser, 1996; Lambert, 1989; Harari, 1992, 1989; Klasek, 1992)。さらに教育面においては、国際化の推進とは国際的な事象を学べるプログラムと機会を増やすことだけでなく、カリキュラム全体に国際的な見地を組み入れることが必要とする主張もある(Tonkin & Edwards, 1981)。

北米において、国際化を語る時「教育」に焦点を当てているものが多い。研究は本質的に国際的なものであり、教育面(特にカリキュラム)における国際化こそが重要というスタンスでの定義づけが主流である。これは後述する米国の国際化における歴史的、政治的文脈と深い係わり合いがあると同時に、グローバル化の進展による学問領域における国際化の進行も影響している。今日の社会を席卷する最もパワフルな力はグローバル化であり、特に経済、コミュニケーション(情報通信)、国家安全保障のグローバル化が顕著である。それに伴い全米で学問の国際化が急速に浸透している実態がある(Groennings & Wiley, 1990)。¹⁾ さらに、教育の成果においても、国際化が反映されなければならないという視点から、次世代の世界においては、ほとんどの分野で国際的な協働と競争が混在するという想定の下、大学はそれに対応できる人材(卒業生)を輩出しなければならないということが強く意識されている(AIEA, 1996)。

国際化の概念において、カリキュラムだけでなく、キャンパス・コミュニティの構成員(人)について言及したものも多い。Harari(1992)は国際的な特性をもった大学を作るとい

うことは、カリキュラムとキャンパスの人々（学生・教職員）を国際化するということが同等としている。これを前提に、彼は大学を真に国際的なものとするための鍵は、提供している科目を国際化するために真摯に取り組んでいる教授陣がいるかどうかにかかっているとしている。もし大学の教授陣がそうであれば、異文化（社会）理解を深める全学的な姿勢がキャンパスに存在するとしている(Harari, 1992)。

米国の大学で国際教育交流を担当している副学長クラスが加入できる組織である Association of International Education Administrators (1990) は、大学の地域貢献まで視野に入れた定義を示している。国際化とは、「相互依存の世界への対応を推進するために、大学の教育、研究、公的（地域）サービス機能において、国際的な内容、教材、活動そして国際理解を組み込んでいくこと」(p.2)としている。さらに、NAFSA: Association of International Educators の年次大会などに参加すると、方法論の一つとして、国際的な観点を大学の持っているすべての学問領域、すべての専攻・副専攻の卒業要件、教員採用基準、大学の建学の精神等に織り込んでいくことによって、システムティックに国際的な要素を大学に注入できるというような具体的な取り組みを提唱する動きもある。このようにミクロの視点から大学の活動一つ一つにおける国際化を考えると、国際化が様々な形態と意味を持つことがわかる。

さて、カナダの研究者は国際化をどのように定義しているであろうか。代表的なものとして、Knight(2004)は、「中等後教育の目的、機能または伝達方法に国際的、異文化的またはグローバルな次元(dimension)を統合していく過程(process)」(p. 11)としている。国際化の定義において、この過程(process)という言葉はよく使われる。これは、国際化が進行中かつ継続的な努力であるというメッセージを含み、かつ国際化という概念に対し、進化的かつ発展的な特質の外延を示している。また、過程(process)という言葉は、教育に関する3局構造(input, process, and output)の一つとして想起される(Knight, 2004)。それでは、国際化の定義において、なぜ入力(inputs)と出力(outputs)あるいは成果(outcomes)は使われないのであろうか。Knight (2004)は、「もし国際化が入力(inputs)と出力(outputs)あるいは恩恵(benefits)という言葉で定義されるなら、特定の国、教育機関あるいは利害関係者の中の特定のグループの優先事項を反映したものとならざるを得ず、よって、(定義としては) 包括的なものでなくなってしまう」(p. 11)としている。

2. 米国における高等教育の特徴と国際化

米国において、高等教育の国際化に影響を及ぼすと考えられる環境的な特徴について、El-Khawas (1994)は次の4点を指摘している。

- ① 個々の大学の活動を指導するような国家的あるいは政府のポリシーがない。
- ② 個々の大学の活動のための助言や指導の主たるソースは私的なものである。
- ③ 個々の大学の国際的な活動を実行するかしないかは、かなりの部分大学のリーダー（執行部）の決定による。
- ④ 国際的な活動は一般的に独立採算の仕組みの下に運営されている。(p.90)

また、上記に関連して、国際教育への体系化されていない取り組み、国際化への政治的な根拠が優勢であること、そして米国の高等教育の全体的な特徴（連邦政府が効果的にマスカ化した高等教育をコーディネートできないことが教育機関の多様性を高めた等）が直接的

に影響し合っていると述べられている(El-Khawas, 1994)。米国の高等教育の特徴として、Kerr (1994)は大学が常に周囲の様々な社会的グループからの圧力や抑制を受けやすいと同時に、相対的には機関としての高い自治と教員個人の高い学問的自由があることを指摘している。

20世紀(特に1920年代以降)になると、米国の高等教育は次第に世界的な優位性を高めていった。それまで、米国の大学は欧州の大学と従属的な関係の下、その役割の一つは、教授陣を介して、先進的な欧州の知識と科学技術を輸入し、米国民に教授することであった。しかし、それが世紀の節目を境に徐々に逆転して行く。今日において、米国の高等教育を語るとき、その規模の大きさ、優位性、独自性や多様性と共に、孤立的で尊大かつ内向きの傾向がよく指摘される(Clark, 1994)。しかし、これは高等教育に限ったことではなく、米国の社会一般において、文化的な偏狭性は広まっている。米国人以外に指摘されるだけでなく、米国人自身も知識層を中心に自分たちがかなり偏狭的で、世界の地理、民族や出来事に無知であることを認識している(Lambert, 1994)。Harari(1992)は米国が国レベルでは、(単一文化ではないとしても)かなり偏狭的で単一言語的であることは明白な事実であると指摘している。これが米国における国際教育の特徴的な様相として、偏狭心の克服を強調している背景かつ動機付けであり、さらに高等教育での国際教育(特に海外留学)が、主として学士課程の問題(将来の就職に結びつく大学院レベルでの専門的な教育への準備として、学生が受けるべき一般教養の一部)として捉えられている理由である(De Wit, 2002)。

De Wit (2002)は、直接的には相互の関連性がない多数の国際教育アクティビティ、プロジェクト、プログラム(国際教育の名の下に集約された海外留学、外国人留学生、国際的な学問、地域学、技術援助等を指す)の断片的な発展と、他の根拠に比べて浸透した政治的な根拠(外交政策、国家安全保障、平和と相互理解等)が20世紀の初頭から冷戦の終結の間に米国における高等教育の国際的な次元(dimensions)を決定付けたと主張している。

連邦政府が高等教育に対しては非常に限定的な政策しか持たないという文脈において、国際化への推進力は、高等教育の外と内(大学等の機関)から生み出される必要がある。一つは外交政策と国家安全保障(高等教育の外)であり、もう一つは個人々の平和や相互理解への涵養と実際的な異文化体験(高等教育の内)の推奨であり、これらは他の国際化への根拠を凌駕している(De Wit, 2002)。これについては、さらに Halpern (1969)が米国の傾向として述べている「米国は愛国心と国際協調主義の両方の必要性に直面するとき、後者を支持しながら前者を取る」(p. 90)と符合する。米国では、上記二つの根拠に比して、国際化の経済的な根拠や学問的な根拠は、豪州や英国ほど強くなく、最近になって注目されるようになった。このような米国の国際化の文脈と根拠の下で、国際教育における強いアドボカシー(擁護的)文化と精神的なアプローチが大学レベルや連邦政府と高等教育セクターを仲介するような機関のレベル、さらに国際教育に関する民間の基金や団体において育まれていった(De Wit, 2002)。

3. カナダの国際化の現状

カナダについては、紙面の関係上、ここでは高等教育における国際化の現状を述べるにとどめたい。上述した Knight の高等教育における国際化の定義が世界中の研究者によって、

引用されており、当該分野におけるカナダのプレゼンスは高まっている。さらに一般的な認識として、カナダにおける多文化理解・共生への取り組み、異文化に対する寛容性の高さには定評がある。しかしながら、国際化については、現場レベルで種々の問題点が指摘されている。カナダにおいて、国際教育はカリキュラム、教授方法、学習方法において重要な位置づけとはなっていない。理由としては、カリキュラムが伝統的に特定民族のものをベースとしており、教員は自分たちが習ったとおりに教える傾向が強いため、変化は遅々として進まないこと、また知識集約型社会への移行により、コア科目あるいは必修科目が増加する傾向にあり、学生は国際教育を学ぶ機会が奪われていることなどが指摘されている(Knight, 2000)。結果として、グローバルなあるいは多文化的な視点での思考が求められているにもかかわらず、国際教育は教員養成課程における周辺領域程度の位置づけに留まっている(Bennett, 1992)。

4. まとめ

国際化は、国際的な視点を大学のシステムに統合していく過程であり、継続的、未来志向的、学際的なものであると共に強いリーダーシップによって推進される今日の大学のありべき姿である。グローバル化した政治、経済、社会、そして文化の領域において、多次元的な環境変化に対応しながら、大学がグローバルに、相対的に、そして協力的に思考できるようになるためには、全学的に学内の様々なシステムを改革する必要があり、それを実現するためには、大学のビジョンを作り、また学問領域事項と学生領域事項の両方において、関係者の動機付けを促す役割を担う大学執行部の関与なくしては成し得ない。そして、グローバルな視点からの思考なしでは対応が困難になっているほど、変化し続け、かつ多様な外的環境に対しては、国際化こそが大学の適応を促す唯一の方策であろう(Ellingboe, 1996)。

米国の国際教育を語る時、その背景としてあるいは国際的な次元への動機付けとして、20世紀の第2四半期以降における米国の偏狭性と尊大さの結合が挙げられる。また、米国における高等教育の国際的な次元は第二次世界大戦後（冷戦下）に、より組織的かつ構造的になったといえる。この国際的な次元は、戦後の平和と相互理解への希求に米国の外交政策が合わさることによって、より活性化された。冷戦下、米国政府は防衛、民主主義、安全保障を理由として、国際交流と国際協力を推進し、冷戦後においても、これらは国際化に対する連邦政府の主たる根拠となり続けている。しかしながら、高等教育の国際的な競争力強化も次第に国際化の理由となってきたことも看過すべきではない。

米国の高等教育は主として学士課程において、どこよりも長期的にそして専門的に国際教育における広範かつ多様なアクティビティ、プログラム、プロジェクトを開発してきた。例えば、国際的なカリキュラムの開発、地域学、外国語教育、海外留学、学生交流、外国人留学生のリクルートとアドバイジング、開発援助と国際協力などである。しかしながら、それと同時に、米国のほとんどの大学が機関としての組織全体に対する（全学的な）国際化の戦略を持っていないと指摘されている(De Wit, 2002)。その意味からは、米国の国際教育は統合されることもなく、断片的であると言える(Mestenhauser, 1998)。だが、これは世界的に見て、稀な米国の高等教育の特殊性や連邦政府と民間団体等の高等教育に関する役割を考慮すれば、むしろ当然の帰結ともいえる。

<注>

¹⁾ 日本の大学の国際化においてカリキュラムや教育内容の国際化が中心的な課題とならないのは、日本の大学が、明治以来現在に至るまで、欧米の先進的な知識、科学技術を輸入し、学生に教授することを主たる役割として担っていったからである。カリキュラムの国際化を謳わずとも教材から講義内容まで基本的に欧米のものをベース（狭義の国際的なもの）としているといえる。

<参考文献>

- Association of International Education Administrators Working Group (1996). *A Research Agenda for the Internationalization of Higher Education in the United States*. Recommendations based on August 10-11, 1995 Meeting, B. Burn and R. Smuckler, co-chairs. Pullman, WA: AIEA Secretariat, Washington State University.
- Bennett, C. (1992). Strengthening Multicultural and Global Perspectives in the Curriculum. In K. Moodley (Ed.), *Beyond Multicultural Education* International Perspectives*. Calgary, Alberta: Detselig Enterprises Ltd.
- CBIE. (2002). *The National Report on International Students in Canada 2000/01*. Ottawa: Canadian Bureau for International Education.
- Clark, B. R. (1994). The Insulated Americans: Five Lessons from Abroad. In P. G. Albach, R. O. Berdahl, & P. J. Gumpert (Eds.), *Higher Education in American Society*. New York: Prometheus Books.
- De Wit, H. (2002). Internationalisation of Higher Education in the United States of America and Europe: a historical, comparative, and conceptual analysis, *Greenwood Studies in Higher Education*, Connecticut: Greenwood Pres.
- El-Khawas, E. (1994). Towards a Global University: Status and Outlook in the United States. *Higher Education Management*, 6, 90-98.
- Ellingboe, B.J. (1996). *Divisional Strategies on Internationalizing the Curriculum: A Comparative Five-College Case Study of Deans' and Faculty Perspectives at the University of Minnesota*. Unpublished Master of Arts Thesis, June 27, 1996.
- Groennings, S. & Wiley, J. (1990). *Group Portrait: Internationalizing the Disciplines*. New York: The American Forum for Global Education.
- Halpern, S. (1969). *The Institute of International Education: A History*. Doctoral Dissertation, Columbia University.
- Hanson, K.H. and Meyerson, J. (eds.) (1995). *International Challenges to American Colleges and Universities: Looking Ahead*. Phoenix, AZ: American Council on Education and The Oryx Press.
- Harari, M. (1992). The Internationalization of the Curriculum. In C. B. Klasek (Ed.), *Bridges to the Future: Strategies for Internationalizing Higher Education*. Carbondale: Association of International Education Administrators.
- Harari, M. (1989) *Internationalization of Higher Education: Effecting Institutional Change in the Curriculum and Campus Ethos. Occasional Report Series on the Internationalization of Higher Education, Report #1*. Long Beach, CA: California State University, Center for International Education.
- Kerr, C. (1994). *Higher Education Cannot Escape History: Issues for the Twenty-First Century*. Albany: State University of New York Press.

- Klasek, C.B. (1992) In Hanson, K.H. and Meyerson, J. (Eds.) *International Challenges to American Colleges and Universities: Looking Ahead*. Phoenix, AZ: American Council on Education and The Oryx Press.
- Knight, J. (2004). Internationalization Remodeled: Definition, Approaches, and Rationales, *Journal of Studies in International Education*, 8(1), 5-31.
- Knight, J. (2000). *Progress and Promise: The 2000 AUCC Report on Internationalization at Canadian Universities*, Ottawa: Association of Universities and Colleges of Canada.
- Lambert, R. D. (1994). Parsing the Concept of Global Competence. In R. D. Lambert (Ed.), *Educational Exchange and Global Competence*. New York: Council on International Educational Exchange.
- Lambert, R.D. (1989) *International Studies and the Undergraduate*. Washington, DC: American Council on Education.
- Mestenhauser, J.A. (1996) Portraits of International Curriculum: An Uncommon Multi- dimensional Perspective. *Seminar Paper for the Spring 1996 Faculty/Student Seminar: "Internationalization of the Curriculum" and a Working Paper in the Institute of International Studies and Programs' Series on Semester Conversion and Internationalization*.
- Mestenhauser, J. A.(1998). *Reforming the Higher Education Curriculum: Internationalizing the Campus*, Phoenix: American Council on Education and The Oryx Press.
- Pickert, S. and Turlington, B. (1992). *Internationalizing the Undergraduate Curriculum: A Handbook for Campus Leaders*. Washington, DC: American Council on Education.
- Tonkin, H. & Edwards, J. (1981). *The World in the Curriculum: Curricular Strategies for the Twenty-first Century*. New York: Change Magazine Press.